

投手の球数制限の経過

2018年 12月22日	新潟県高野連が、19年の春季新潟県大会で投手の球数制限を導入することを表明
19年 1月7日	日本高野連が、新潟県高野連の杵鞭義孝専務理事から経緯などを聴取
9日	日本高野連の業務運営委員会の中で「特例導入」に否定的な意見が複数出る
2月4日	スポーツ庁の鈴木大地長官が投球回数、球数に一定の制限を設けることが望ましいと言及
20日	日本高野連の理事会で新潟県高野連に再考を要望。「投手の障害予防に関する有識者会議」を4月に発足させることを決定
3月18日	新潟県高野連が今春の球数制限導入見送りと、有識者会議への参画を表明

今春の新潟大会球数制限

県高野連 導入見送り

新潟県高野連は18日、日本高野連から再考を求められていた今春の新潟大会に限った投手の球数制限導入について、実施を見送ることに決めたと発表した。日本高野連で4月に発足する「投手の障害予防に関する有識者会議」に参画することも表明し、新潟県高野連の富樫信浩会長は「私どもの考え方を会議の中で意見反映できると、前向きに捉えた中での見送りということ」と述べた。

議論前進も道半ば 再考要請受け入れ

新潟県高野連は18日、日本高野連から再考を求められていた今春の新潟大会に限った投手の球数制限導入について、実施を見送ることに決めたと発表した。日本高野連で4月に発足する「投手の障害予防に関する有識者会議」に参画することも表明し、新潟県高野連の富樫信浩会長は「私どもの考え方を会議の中で意見反映できると、前向きに捉えた中での見送りということ」と述べた。

戦で全国初となる取り組みに注目が集まったが、日本高野連は2月の理事会で「勝敗に影響を及ぼす規則は足並みをそろえて検討すべきた」などの理由で、再考を要請していた。日本高野連は「議論は前進も道半ば、再考要請を受け入れ」と述べた。

新潟県高野連が今春の新潟大会限定での独自導入を目指した投手の球数制限は18日、実施の見送りが発表された。全国で足並みをそろえることなどを重要視する日本高野連側の再考要請を受け入れる形となったが、昨年12月の導入表明で議論は確実に前進。新潟県高野連の富樫信浩会長は「一石は投じたと思うが、これで終わりではない」と述べた。

道半ばを強調した。スポーツ庁の鈴木大地長官や、プロ野球選手からも新たな取り組みを後押しする声が上がった。DeNAの筒香嘉智外野手は「新潟が最初に敬意を持ってやる行動に敬意を払いたい。なかなか進まないことだが、子どもたちの将来がかかっている」と言葉に実感を込めた。日本高野連は4月に外部有識者による会議を発足させる。会議に出席する富樫会長は「(今は)勝負が第一になっているが、プレーヤーの将来が第一。それを分かってもらえるように説明していくことが一番大事なこと。球数制限はその中の一つの手法」と主張。トーナメント制の問題点や、スポーツマンシップの在り方など、抜本的な改革を訴えていく構えだ。

「いいきつかけに」

八学光星の仲井監督

野連の竹中雅彦専務局長は「一歩前に踏み出すのを押していた。新潟県高野連と一緒に頑張ってほしい」と話した。

新潟県高野連が投手の球数制限導入を見送ったことについて、今夏に開催される18歳以下によるU18ワールドカップ(W杯)に出場する高校日本代表ヘッドコーチで、八学光星の仲井宗基監督は18日、甲子園球場で取材に応じ「投げすぎて壊れるような選手が出てこないようにする、一つのいいきつかけにはなっと思」と述べた。

仲井監督は新潟県高野連が一時導入を表明したことで、選手の将来を考えると、議論が深まったとの認識を示し「われわれもしっかり考えていかないといけない」と語った。

一方、第91回選抜高校野球大会出場校のある投手は「複数の投手を擁する私立校が有利になるとして、球数制限に反対の意向を示し(けがへの不安はない)」と話した。

「前向きな見送り」
富樫会長の一問一答

新潟県高野連の富樫信浩会長の一問一答は次の通り。

―球数制限を撤回した心境は。
 「撤回とは考えていない。あくまでも見送り。再考ということは、春からはやらないでほしいという意味。致し方ない」
 ―率直に残念か。
 「われわれの取り組みを受け入れてもらえなかったのは残念だが、球数制限は一つの方法。議論が深まれば良いと思う」
 ―見送りの理由は。
 「日本高野連の、有識者会議で議論を前に進めていこうという考え方は非常にありがたい。私どもの考え方もその中で意見反映できると、前向きに捉えた中での見送り」
 ―球数制限は今後も訴えていくか。
 「球数制限だけではなく、トーナメント制の在り方や大会日程の過密さなど、いろんな問題をはらんでいる。その方向性を見ていくのが有識者会議だと思う」